

生徒会放送委員会による「1.17 震災の記憶」を語り継ぐ朝の放送

本校では、防災学習の一環として、放送委員会が1月17日の

「防災とボランティアの日」に合わせ、全校生徒に向けたメッセージを発信しました。その内容をご紹介します。

■1月16日（金）の放送：知識を「備え」に変える



17日を翌日に控えたこの日、放送委員は数字を交えながら、当時の被害の大きさと「備えること」の重要性を訴えました。

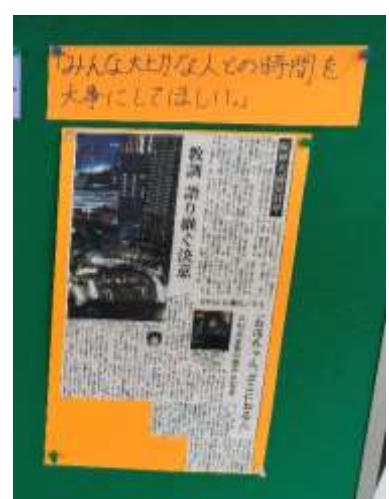
「31年前の1月17日午前5時46分、マグニチュード7.3の大地震が阪神・淡路を襲い、6,434人の命を奪いました。そのうち77%が火災、家屋倒壊による窒息死、圧死で亡くなられました。A先生には、東日本大震災のお話を9月1日にしてもらいました。どのような備えが必要かを思い出しましょう。以上で、朝の放送を終わります。」



■1月19日（月）の放送：大切な人との時間を慈しむ

週明けの放送では、神戸で行われた追悼式「1.17のつどい」に触れ、防災を「心の在り方」として捉え直しました。

「追悼式で遺族代表の佐藤悦子さんは、『お母ちゃんどこにおるん。もう31年会えてないよ』という言葉から始められました。そして最後に、『みんな大切な人の時間を大事にしてほしい』と締めくくられました。みなさんの、身近な仲間への言葉や態度はどうでしょうか。震災の記憶は、今ある当たり前の日常を見つめ直すきっかけにもなります。以上で、朝の放送を終わります。」



防災学習を、単なる安全確保の知識に留めず、「他者への思いやり」や「日々の人間関係」にまで広げて考える、放送委員会の深い視点が光りました。